

京都大学言語学懇話会
2015 年度 発表要旨

例会報告

第 97 回例会

日時・場所 2015 年 4 月 11 日 (土) 13:30-16:45 於文学部校舎第一講義室
発表題目 「モンゴル語の母音調和と母音体系」

植田 尚樹 (京都大学)

「言語研究における説明の 3 水準
—坂本 (1995, 1997, 2005) の『三位一体説』を再考する—」

酒井 弘 (早稲田大学)

第 98 回例会

日時・場所 2015 年 7 月 11 日 (土) 13:30-16:45 於文学部校舎第一講義室
発表題目 「琉球奄美喜界島上嘉鉄方言の形容詞と比較表現について」

白田 理人 (日本学術振興会／琉球大学)

「Kiparsky の母音交替モデルから見えるラテン語アクセント先史」

西村 周浩 (京都大学)

第 99 回例会

日時・場所 2015 年 12 月 19 日 (土) 13:30-16:45 於文学部校舎第一講義室
発表題目 「ムラブリ語の方言差—同じ文法, 違う語彙—」

伊藤 雄馬 (京都大学)

「ウガンダ西部諸語の声調の比較研究」

梶 茂樹 (京都大学)

モンゴル語の母音調和と母音体系

植田 尚樹

モンゴル語（ハルハ方言）の母音調和は、「素性 [pharyngeal] [round] の左から右へのスプレッドである」と捉えられてきた。しかし、借用語を中心に、「左から右」の母音調和に反するような現象が散見される。例えば、第2音節以降のアクセントを持つ母音が母音調和のクラスを決め、先行する母音を同化させる例がある。このような例に対して「借用語を例外とする」と捉えることも可能ではあるが、本発表では、語幹内の母音調和と接尾辞の母音調和が本質的に異なるものである可能性を指摘した。「語幹内は母音素性が全て完全に指定されており、接尾辞にのみ素性の左から右へのスプレッドが起こる」と捉えることで、語幹内の母音調和には例外があるのに対し、接尾辞の母音調和は、必ず語幹内のいずれかの母音と調和するという意味で例外がないことなどを自然に説明できる。

また、モンゴル語（ハルハ方言）の母音体系に関して、「第1音節では母音の長短の対立があるが、第2音節以降は音素的母音と（音素的でない）挿入母音の区別である」という先行研究に対し、この解釈では借用語の扱いが問題になることを示した。先行研究によると、借用語の第2音節以降において、原語でストレスを持つ母音は音素的母音となるのに対し、ストレスを持たない母音は、音素的には存在せず、音声的に弱化母音が挿入されるとされている。しかし実際には、ストレスを持たない母音は弱化せずに現れることが多く、また接尾辞の母音調和を引き起こすことから、音素的に存在すると考えざるを得ない。この事実を説明するには、第2音節以降にも母音の長短の対立を認めるなど、母音体系について再考する必要がある。

（うえた なおき）

言語研究における説明の三水準
—坂本（1995, 1997, 2005）の三位一体説の再考を通して—

酒井 弘

本発表においては、坂本勉（1995, 1997, 2005）において提唱された「言語研究における三位一体説」の今日的意義を、David Marr (1982) において提唱された「認知科学における説明の三水準」と比較しつつ検討した。坂本の「言語理論」は Marr の「計算レベル」、
「解析装置」は「アルゴリズムレベル」の説明対象に相当することを指摘した上で、これらのレベルの相違は、計算もしくは処理の時間的側面を考慮しているか、否かという点にあると主張した。この主張を具体的に例示するため、マヤ諸語の一つであるカクチケル語を対象としたフィールド言語認知神経科学プロジェクトの一部として実施された語順の産出をめぐる研究（久保他, 2015）を紹介した。カクチケル語においては、類型論的に希少な語順である V O S 語順が許容されるが、文産出時の視線計測実験を通して、V O S 語順を産出する際でも、話者は S の処理から文の構築を開始していると考えられることを説明した。このような結果は、「言語理論／計算レベル」と「解析装置／アルゴリズムレベル」の説明が、必ずしも単純に対応しないことを示唆している。今後の研究の方向性として、異なるレベルの説明の対応関係を探るため、類型論的に多様なより多くの言語から心理言語学的実験によるデータを収集する必要があることを指摘した。

(さかい ひろむ)

きかいじまかみかてつ
琉球奄美喜界島上嘉鉄方言の形容詞と比較表現について

白田 理人

琉球諸語の形容詞の伝統的な分析においては、「サアリ」形を持つ方言と「クアリ」形を持つ方言があるとされてきた。琉球奄美喜界島上嘉鉄方言はその両方が見られ、後者が比較表現に用いられる点、動詞もホストとしうる点が特徴的である。また、琉球諸語の形容詞の品詞分類について、従来における活用形形容詞が語形変化を動詞と共有していることから、これを動詞と分析する立場が提案されている。以上を踏まえ、本発表では、琉球奄美喜界島上嘉鉄方言の形容詞・比較表現の記述として、形容語根の形態音韻論的特徴、形容語根から作られる諸形式の形態統語論的特徴、比較表現の特徴と形容詞の認定に関わる品詞分類を示した。主な観察・主張は以下である。

- 形容語根の形態音韻的特徴について
 - 形容語根は語根末音からクラス I とクラス II に分けられる。
 - クラス II は後接する接辞によって末尾音節 *si/ti* が脱落する。
 - クラス II は末尾の長母音化により名詞修飾形を成す。
- 形容語根からなる諸形式の形態統語論的特徴について
 - 形容語根 *+sa(r)-* : 動詞修飾及び述語 (語形変化は動詞に準じる)
 - 形容語根 *+ku* : 動詞修飾
 - 形容語根 *+ka* : 名詞修飾
 - 形容語根 (クラス II) 長母音化 : 名詞修飾
 - 複合 (形容語根 + 名詞) : 名詞
- 比較表現について
 - 比較の基準を標示する助詞=*ka* あるいは述語の比較標示=*ku* が用いられる。
 - =*ka* と *-ku* は共起してもしなくてもよい。
 - *-ku* は形容語根、動詞の肯定非過去形=*in*、否定非過去形=*(r)an* に後接する。
- 品詞分類について
 - *-ku* 形は原則として動詞を伴うため副詞に分類する。
 - *-sar*-形は動詞と同じ語形変化を示し、動詞に分類できる。

(しらた りひと)

Kiparsky の母音交替モデルから見えるラテン語アクセント先史

西村 周浩

印欧祖語の母音交替は、1970年代以降、語根・接辞・語尾の間で移動するアクセントとの関係においてパラダイム単位で捉えられるのが一般的であった。これに対し、近年 Paul Kiparsky が新たな枠組みの構築を目指そうとしている。本発表は、Kiparsky が導入したいくつかの基本原則を採用しながら、ラテン語がアクセント規則に関して印欧祖語の段階からどのような変化を経験したのかを考察したものである。

ラテン語のアクセント規則は、古典期の Penultimate Law が最もよく知られており、前古典期においてもそれに近いアクセント付与規則が働いていた。それよりも古い前文学時代には、初頭音節に強勢アクセントを付与するルールが機能していたと考えられており、そのことは初頭以外の音節における母音の弱化・脱落からうかがえる。さらに遡った時代については、近年の研究の中で、印欧祖語から引き継いだアクセント規則、あるいはそれに近似する規則が働いていたことが徐々に明らかになってきた。

ここで問題となるのが、印欧祖語のアクセント体系からどのようにしてラテン語の初頭音節強勢付与規則に至ったのかという点である。ラテン語の特徴としてギリシア語やヴェーダ語と大きく異なるのは、語末音節が示す extrametricality である。この点は前文学時代以降古典期に至るまで一貫した特徴である。語末音節の extrametricality がラテン語に導入された際何が起こったのか、この問題を解く手がかりとして、名詞複合語、とりわけ verbal governing compound (VGC) に注目した。と言うのも、このカテゴリーに属する相当数の複合語が印欧祖語の段階で語末音節にアクセントをもっていたからである。本発表は、ラテン語が経験した母音の弱化に注目し、VGC のどの母音が弱化を受けたり免れたりしているのかを分析、これにより、語末音節の extrametricality が引き起こしたと考えられるアクセントの移動のプロセスを提示した。

(にしむら かねひろ)

ムラブリ語の方言差—同じ文法，違う語彙—

伊藤 雄馬

ムラブリ語（オーストロアジア語族・クム語派）はタイ，ラオス国境で話される言語で，A方言（タイ，約400人），B方言（タイ，6人），C方言（ラオス，13人）の区分が報告されている。方言比較に関する唯一の研究である Rischel(2000)によれば，ムラブリ語の方言は，文法がほぼ同じであるのに対し，語彙に大きな違いがあるという。しかし，Rischel(2000)は例示が少なく，不明な点も依然多い。本発表では，A方言とB方言を対象に，文法と語彙の差異を，より具体的に明らかにすることを目的とする。

文法については，音韻論（音素，音素配列，イントネーション），形態論（接頭辞，接中辞），統語論（二重目的語，「道具格構文」）の比較を行った。結果，音素，接頭辞，「道具格構文」は同じ特徴が見られるのに対し，音素配列，イントネーション，接中辞，二重目的語について部分的に異なることがわかった。

語彙については，ライブツイヒ・ジャカルタリストの100項目を比較した。語形が完全に一致する「完全一致」が61項目，語の一部のみ一致する「部分一致」が9項目，以上を同源語と考えると，その項目は70項目となった。一方で，同源語の存在が見られない項目，すなわちA方言とB方言で語形の全く異なる項目は28項目あった。残りの2項目はB方言データに存在しなかった。また，音対応で説明のつく項目も存在しなかった。

語形の全く異なる項目については，借用がその原因の大半であるが，造語による置換えの疑われる例も確認された。また，「完全一致」の例で，意味に「ねじれ」の見られる項目があった。例えば，A方言で「男ことば」とされる形式が，B方言では「女ことば」となる項目が複数確認された。

以上の比較結果から，ムラブリ語の方言分岐は，音変化による分岐ではなく，語彙の置き換え，または「ねじれ」のような意味変化による分岐であったと考えられる。

(いとう ゆうま)

ウガンダ西部諸語の声調の比較研究

梶 茂樹

アフリカ東部のウガンダ西部からタンザニア北西部にかけて、南からハヤ (Haya) 語、キガ (Kiga) 語、アンコーレ (Ankole) 語、トーロ (Tooro) 語およびニョロ (Nyoro) 語という系統的に非常に近いバンツ系言語が連綿と話されている。これらの言語の声調を見て気づくことは、一番南のハヤ語が、比較的古い体系を有しているのに対して、北に行くに従って単純化し、トーロ語では対立が失われてしまっていることである。本発表では、私の現地調査の資料に基づき、ハヤ語、アンコーレ語、ニョロ語およびトーロ語の4言語の名詞の声調を比較し、その歴史的変化を再構成する。

ハヤ語の名詞の声調のパターン数は、語幹の音節数を n とすると $f(n)=n+1$ という式で表される。これは日本語アクセント論で言えば東京式である。ハヤ語では基底の区別は単独形でも保持される。ただ、H-1 (H が語末の音節に来るタイプ) は、単独形では…HL という風に、H が1つ前の音節で実現される。そして H-2 (H が語末から2番目の音節に来るタイプ) は単独形では…FL となる。ハヤ語の北に話されるアンコーレ語は体系としてはハヤ語と同じであるが、H-1 と H-2 が単独形では区別されず、いずれも…HL となるという風に、ハヤ語と比べれば少し単純化している。ただポーズの前という条件を外せば区別は明らかとなる。

ニョロ語の体系は、いわゆる2型タイプで、H-1 と H-2 しかない。単独形では H-1 は…HF、そして H-2 は…FL となる。そしてトーロ語は1型タイプで、単独形ではすべて…HL となる。

アンコーレ語からニョロ語への変化を見ると、H-1 は H-1 のままであるが、それ以外は H-0 を含め、すべて H-2 パターンへと合流しているのがわかる。そしてニョロ語からトーロ語へは H-1 と H-2 がいずれも H-2 となるのである。語末2音節目の H というのは、少なくともこの地域のバンツ系諸語ではデフォルト的 H のようである。

(かじ しげき)